

広報

あいづばんげ

1 2017 No.629



特集

ばんげの地酒で
乾杯！

「新年のごあいさつ」

～生涯安心して

住み続けられるまちづくり～

会津坂下町長 齋藤 文英



新年明けましておめでとうございます。
平成29年の新春を迎え、新しい年

が町民のみなさま方にとりまして、
良い年であることをお祈り申し上げ
ます。

昨年は、南米初開催となるリオデ
ジャネイロ五輪が開催され、日本は
史上最多の41個のメダルを獲得し、
2020年東京五輪に向けて、期待
を膨らませる成果をあげました。東
京五輪では、野球・ソフトボール競
技の一部が福島県内で開催されるこ
とが検討されており、実現すれば、
東日本大震災で被災した地域の復興
支援や、将来が期待される子どもた
ちへのスポーツ振興の面からも非常
に有意義なことであると考えます。

11月22日の早朝には、福島県沖を
震源とする最大震度5弱、本町にお
いては震度4の地震が発生しまし
た、余震も続き心配されましたが、
日頃より一層の安全安心と危機管
理体制の確保の重要性が、あらため
て確認されるものでありました。

昨年の町の取り組みでは、幼児
教育の充実と待機児童の解消を目的
に、幼児年齢区分けによる幼稚園の
3歳児保育を開始し、保育所の0歳
児の受け入れ増員を実施いたしまし
た。

7月には「子育てふれあい交流セ
ンター」を旧金上小学校に開所いた
しました。親子の交流や、子育てに

関する情報提供、相談等を行い、子
育てに関して「安心感」「充実感」「子
育ての楽しさ」を得られ、子どもた
ちが家族や地域の愛情に包まれなが
ら、健やかに成長していけるよう支
援してまいります。オープン以来、
近隣市町村や、遠く県外からもご来
場があり、当初の予想を上回る多く
のみなさまにご利用いただいており
ます。南小学校プールの改築工事も
6月に竣工となり、教育施設に係る
環境整備が終了いたしました。

また、「会津の三十三観音めぐり
」巡礼を通して観た往時の会津の文
化」が日本遺産の認定を受け、多
くの方々が会津に來られると予想さ
れますので、関係機関と連携し、お
もてなしの強化を図ってまいりま
す。



7月に開所した子育てふれあい交流センター

道の駅あいづ 湯川会津坂下で
は、年間来場者数100万人、年
間売上高5億円を超えるなど好調に
推移しており、魅力ある地域振興の
拠点となるよう、各種イベントを
開催し誘客につなげ、町農産物・物
産品等の販売促進を図ってまいりま
す。震災原発事故から6年目を迎え
ようとしておりますが、いまだ風評
被害が払拭されたいえない状況で
すが、11月には会津みしらず柿の海
外輸出を再開し、タイ及びマレーシ
アに発送いたしました。今後も、会
津みしらず柿の輸出货量拡大と、他
の品目についても取り組んでまいりま
す。

11月30日には、船杉地内において、
長年にわたる重要要望でありました
一般県道赤留塔寺線が開通しまし



坂下南小学校プール



地元の銘酒で迎える新しい年

会津地方は、おいしいお米がとれる米所であることと、冬の寒さが厳しい気候であることから酒造りに最適な環境であり、多くの銘酒が作られています。

ここ会津坂下町にも、古くから地元の人々に愛され、最近では地元にとどまらず県内外で一目置かれる日本酒を作り続けている言わずと知れた酒蔵があります。

今回の特集では、新年を迎えるにあたり、歴史を積み重ねながらそれぞれに特色をもった商品を生み出し続ける3蔵をご紹介します。

地元の方々が丹精込めて作った美酒の味は、新たな年の幕開けを彩ってくれることでしょう。
今年はおいしい地酒で「よいお年を！」

曙酒造合資会社



左から、天明（純米大吟醸・無濾過）、天明（中取り式号）、大俵引き（曙初しぼり）、ばんげやまだ（純米吟醸）、一生青春（大吟醸）

豊國酒造合資会社



左から、真実（吟醸酒）、夫婦さくら（純米大吟醸）、ばんげぼんげ（純米吟醸）、豊國（純米酒）、學十郎（大吟醸）

合資会社廣木酒造本店



左から、泉川（純米吟醸）、飛露喜（特別純米）



撮影協力／酒 bar 橋本



曙酒造

合資会社

曙酒造(資)は、明治37年創業で、現社長で4代目。蔵の歴史は書物としては記録されてはいないが、本家で行っていた酒造業を引き継いだのが始まりだという。

建物自体は創業以前からあるものだが、敷地内の蔵は時代に合わせて改修を加え、最近では冷蔵設備を新しくし、細心の注意を払って品質管理を行っている。

現在、曙酒造(資)の代表格ともいえる日本酒には「天明」「生青春」などがあるが、最も歴史があるのは普通酒の「曙」。

全国的な日本酒ブームを迎えた昭和58年ごろが製造のピークだった。

あるとき、曙酒造(資)は町の特産品づくりをしようと、町内の事業者とタッグを組んで新商品「snowdrop」の商品開発を行った。新たにリキュール販売免許を取得し、出荷目前で起きたのが東日本大震災。原発事故による影響で、A.L.L.会津にこだわっていた原材料の確保が困難となり、ようやく販売できたのは震災から約3か月後のことであつた。

そのため、福島県の安心・安全を象徴する商品としての意味合いも大きくなり、当初の目的と合わせて二つのエピソードを持つお酒となった。

地元から全国へこだわりの日本酒を広めていこうと、日々革新を起こしていく。



蔵内を案内してくれた鈴木孝教さんとアメリカから研修にきているオリビアさん（写真中央）。次世代のためにも設備投資には余念がない。



豊國酒造 合資会社

豊國酒造(資)は、江戸時代の文久2年(1862年)から続く蔵元で、現在5代目。5代目から蔵元が杜氏を兼ねており、外部から杜氏を呼んで酒造りを行っていた当時においては、革新的なことだった。

特級・一級・二級という清酒の級別制度が使用されていたころ、銘柄は5種類ほどであったが、級別制度が平成4年に完全廃止されたことが契機となり、豊國酒造(資)で製造している酒のラベル数は倍以上に増えた。その中で、蔵の歴史においてもっとも古くからあるのが、蔵元の名前をもつ「豊國」で、現在に至るまで数々の賞を受賞している。

さらに、全国新酒鑑評会で9年連続金賞を受賞し、豊國酒造(資)の代表格の一つともいえる大吟醸「學十郎」は、初代の名前から命名した清酒だが、これは平成となり5代目が杜氏になってから造り始めた商品である。

そのほか、近年では飲み口の軽いスパークリングの日本酒を新たに発売するなど、時代のニーズに合わせて新商品を生み出し続けてきた。

全国的に日本酒消費量が落ち込む中、豊國酒造(資)でも新たな販路を求めて都市部などにも商品売り出し、顧客獲得に力を入れているが、やはり一番は「地元のみなさんにおいしいお酒を飲んでいただきたい」というのが5代目の強い思いである。

※アルコール度数と酒質などにより分類するもの。それぞれの級によって課せられる酒税の割合が決められていた。



酒造りへの思いを語ってくれた5代目杜氏の髙久禎也さん。店内に入るとずらりと並べられたお酒の多様さに心躍る。



合資会社 廣木酒造本店

(資)廣木酒造本店は、江戸時代中期の文化・文政年間創業の蔵元であり、現社長の廣木健司さんで9代目となる。

蔵内はコンパクトな構造をしており、「一度に造ることができお酒の量も決して多くはない」と内部を案内してくださった蔵人の板橋さんは言う。

(資)廣木酒造本店で造られるお酒の銘柄は、「泉川」と「飛露喜」の2銘柄で、市場に出回るのは、「泉川」が4種類と「飛露喜」が約10種類である。

この2銘柄は、それぞれに異なるコンセプトを持っている。「泉川」は、「毎日晩酌のときに飲んでもらえるように」という思いから、「飛露喜」と比較するとアルコール度数は低めになっており、飽きの来ないすっきりとした味わいが特徴である。また、福島県内では販売しておらず、その味に魅せられ県外から「泉川」を求めて店を訪れる常連客もみられるという。

一方「飛露喜」は、「ここぞという特別な日に飲んでほしい」というコンセプトのもと造られた、華やかでフルーティーな風味を持つお酒。その味わいはもちろんのこと、希少性もあり全国的に品薄状態が続く。昔から地元で親しまれてきた「泉川」と、1999年から販売が始まり、(資)廣木酒造本店の新たな顔となった「飛露喜」とが、伝統と変革を象徴している。



艶やかな暖簾が来客を出迎える売り場と、蔵内のようす。お酒の原料となる米は会津坂下産の五百万石と兵庫県産の山田錦を使用している。